

あれから5年…歩き始めるアフガニスタン

ずっと、ここで、暮らしたい

— 帰還した村での生活を支える —

2001年夏、長年の内戦と3年続きの干ばつに見舞われていたアフガニスタン北部サリプル州にピースウィンズ・ジャパン (PWJ) は入りました。そこで見たのは、ぼろぼろの布を渡しただけの「テント」で暮らす多くの避難民。9・11米国同時多発テロとその後のアフガニスタン空爆で活動は一時、中断しましたが、2001年暮れ、PWJは避難民キャンプを開設。テントや食糧を配布し、支援を開始しました。

あれから5年…。住民たちは、いまだ困窮のなかにあります。PWJはサリプル州を拠点に、いまでも支援を継続しています。今回は、「ずっと、ここで、暮らしたい」という声を受けて継続してきたPWJのアフガニスタン支援活動について、お知らせします。



● 自立をめざす女性たち ●

PWJが2005年に開設したサリプル市内の女性センター。現在、80人の女性が、裁縫や刺繍などのトレーニングを受け、併設の識字教室で読み書きを学んでいます。

2006年1月に第1期の研修を終えたノリア (25歳) は「近所の人から注文をとって、裁縫で収入を得たい。家計を助けることもできるし、家族からの尊敬も受けられます」と期待を口にします。

アフガニスタンでは、読み書きをできる女性の割合は14% (2004年、人間開発報告書)。女性の外出や就労はなお、容易ではなく、保守的なサリプル州では、このような傾向はとくに目立ちます。一方、男性が紛争で亡くなったり、けがをしたりした家庭では、家計を支える重い責任が女性にのしかかります。

このような背景からPWJは、活動開始以来、女性を対象にした支援を重視。養鶏や、かつて盛んに行われていた養蚕のトレーニングを続け、合わせて識字教育にも取り組んできました。

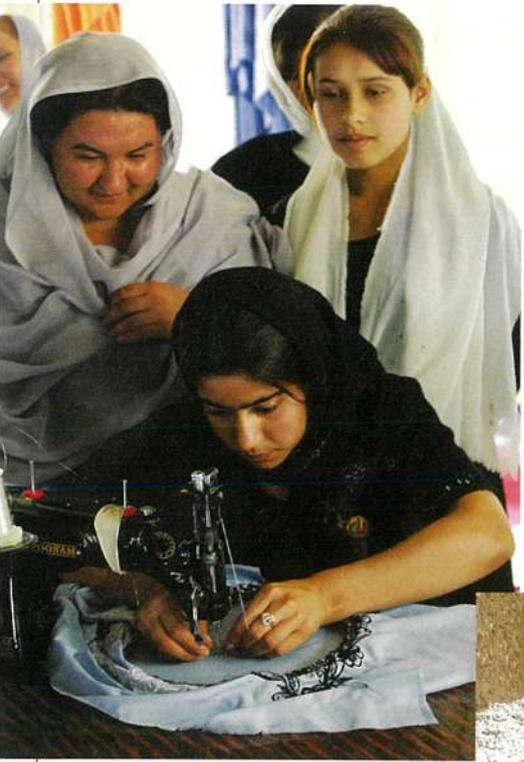
いま一度、アフガンに目を

PWJアフガニスタン駐在
スタッフ 平井礼子

村を離れていた多くの人びとは、避難先のキャンプや隣国のパキスタン、イランなどから村へと帰還し、生活の再建に取り組んでいます。

大統領や議会の選挙、武装解除などが始動し、幹線道路などの大規模なインフラ整備は進んでいます。帰還先での生活は、いまだに厳しいままです。

治安も不安定ななか、現地で活動を続けていますが、「アフガニスタンが忘れ去られてしまうのでは」と不安に駆られることがあります。いま一度、アフガニスタンの人びとの現状に目を向けてほしいと強く感じています。



裁縫のトレーニングを受ける女性



養蚕に取り組む女性
カメラには顔をかくす

● 乾いた大地に緑を ●

サリプル州は農業が活発な地域で、果樹栽培でも広く知られていました。PWJは、住民が村に戻った2002年春に農業支援を開始。住民の自立を意識し、種を「貸し出し」、収穫時に同じ量を「返済」してもらうなどの取り組みも続けています。

2003年には果樹栽培の再興に向けた支援も開始。2006年2月には、果樹園で2年間育成してきた杏やアーモンド、桃などの苗木、合わせて約2万4千本を、28の村で配布しました。春には、スイカやひよこ豆などの種も配布します。



建設中の貯水槽

農業にも、飲用にも、水は大きな課題です。水の確保のためPWJは、2002年夏から、井戸・貯水槽の建設や、岩盤をくり抜いてつくった伝統的な貯水施設「カンダ」への給水なども進めてきました。

現地で降水量や川の水量などの調査・分析を続けている児島淳は「施設をつくるだけでなく、水に関するデータを蓄積し、データに基づいて水の管理を図っていくことが不可欠。将来的には、降水量をみながら作付けする作物を決めるなどの対策も重要」と強調します。



緑の作物に笑顔が重なる

● アフガニスタンでのこれまでの取り組み ●

活動開始以来、PWJは、現地の状況や住民たちのニーズに合わせた取り組みを続けてきました。

2001年7月～11月／国内避難民調査と支援開始準備

2001年7月22日から8月4日まで、第一次調査隊がサリプル州に入り、8月25日から9月4日までは二次隊が現地調査を行いました。PWJはすぐに支援の実施を決めましたが、同時多発テロと空爆のため、活動中断を余儀なくされました。

空爆終了と同時に支援活動を始めるため、スタッフが隣国のパキスタンやトルクメニスタンに滞在し、テントや車両などの調達を進めました。

あのとき 2001年7月ー「目に焼きついたキャンプの窮状」

PWJスタッフ 鈴木広光

第一次調査隊として訪ねたサリプルの国内避難民キャンプは、その前に経験したアルバニアの難民キャンプとは比べものにならない惨状でした。夏だったので、乾燥して暑かったのですが、冬には零下15度にもなると聞き、「冬が来る前に支援を行わなければ」と痛切に思いました。食糧も不足し、水は近くにある汚れたため池の水だけという状況でした。

荒廃したキャンプ



2001年12月～2002年7月／国内避難民キャンプでの緊急支援



テントの配布
(2001年12月)

2001年11月末、PWJは首都カブールに入り、12月にはサリプル州に入りました。

パキスタンで調達した冬用テントを、①直接陸送、②トルクメニスタンに空輸後に陸送、③北部の拠点マザリシャリフへ空輸後に陸送の3つのルートでサリプル州へ持ち込み、12月31日から避難民5613世帯へ配布しました。続いて、42トンのコムと280トンの小麦を配布しました。

PWJのテント



2002年春～／サリプル州内の村での支援



建設中の道路
(2002年9月)

避難民が戻った村にも生活のための基盤はほとんど存在していませんでした。村での支援を始めたPWJは、社会基盤の整備に力を入れました。

道路が整備されていない地域では、生活物資の入手が難しく、農産品を出荷することもできないため、2004年1月に85の村とサリプル州中心部を結ぶ道路を建設したのをはじめ、道路を寸断する枯れ川や用水路に架ける橋の建設を続けてきました。

女子を含めて教育への関心は高く、あちこちで「青空教室」が開かれていました。PWJは、壊れた学校の再建や新たな校

舎の建設も進めました。

女性が現金収入を得るための支援として、養蚕、養鶏などの技術トレーニングも実施しました。

2002年2月～2005年3月／首都カブールでの支援

首都カブールで活動する団体が少なかった時期、PWJはカブールでも事業を行いました。力を入れたのは、女性支援。配偶者を失った女性などを対象に養鶏指導や識字教育などを行いました。また、学校の修復・再建にも取り組みました。

アフガニスタン支援にご協力を

アフガニスタンの支援のため、いま一度、ご支援、ご協力をお願いいたします。

<郵便振替>

口座番号:00160-3-179641
加入者名:ピース ウィンズジャパン
アフガニスタン特定寄付の場合は、通信欄に「アフガニスタン」とお書きください。

<銀行振込>

銀行名:三井住友銀行桜新町支店
口座番号:普通6705251
口座名義:

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン アフガン支援
※銀行振込によるご寄付の場合、領収書・報告書はお送りできません。ご希望の際は、郵便振替・インターネット寄付をご利用ください。

<インターネット寄付>

各種クレジットカードがお使いいただけます。
<http://www.peace-winds.org/> から

※事業地を特定したご寄付について

事業地を特定したご寄付を頂戴した場合、PWJでは、ご寄付額の15%を限度に日本国内における費用(事務所の管理運営費、調査活動や提言活動のための費用など)に充当させていただいております。

会員になって継続的な支援を

PWJの各種の会員になっていただくと、アフガニスタンをはじめとするPWJの支援活動に継続的にご参加いただけます。自由に設定していただいた額を毎月、ご寄付いただく「Aid☆エクスプレス」の制度もあります。詳しくは、お問い合わせください。
電話:0120-252-176 (通話料無料)

今月のオススメ商品!

ピースウィンズ・ショップ

書籍「NGO、常在戦場」(大西健丞著)

PWJ統括責任者・大西健丞の初の著書「NGO、常在戦場」が発売になりました。イラクやアフガニスタンなど、現場の真の姿を綴りました。スタジオジブリの月刊誌「熱風」での連載に書き下ろしを加え、団体設立10年の節目に出版された一冊です。(発売元:徳間書店)



東京事務局から

引っ越しの季節。ご住所、電話番号などが変わった場合は、PWJにもご一報ください。